

## ダニエル書 - 第七十四番

預言の謎を解き明かす：エゼキエルの忌むべき事柄、終わりの日の教会、そして獣の刻印

Jeff Pippenger

2024-02-07

エゼキエル書第八章の四つの忌むべき行為は、神の終末時代のラオデキヤ教会の指導部が太陽を拝むことへと導き、その結果、彼らは獣の刻印を受けることになる。同じ幻である次の章は、神の終末時代の教会のうちで神の印を受ける者たちを描いている。ホワイト夫人は、エゼキエル書第九章の封印が、黙示録第七章に表されている封印と同一であることを私たちに教えている。神は国を第三代・第四代において裁かれ、エゼキエルの四つの忌むべき行為は、1863年に始まった反逆の四世代を指し示している。すなわち、ラオデキヤのアドベンチズムが、古代イスラエルの初めに十戒の二枚の石の板が与えられたのと同様に、神とその民との契約関係の象徴として与えられていたハバククの二枚の板の偽物を導入したときに始まったのである。

アロンの金の子牛は、偽の像であり、神が本物のねたみの像を表す二枚の板を造っていたまさにその時に現れた反逆の象徴であった。アロンの金の子牛は、レビ記二十六章の「七つの時」をはじめ他の時の預言とともに、そのメッセージから取り除いてしまった偽の1863年図表を象徴していた。このように、ラオデキヤ的アドベンチズムは、その歴史のごく初めに、古代イスラエルの初期の歴史におけるアロンや、北王国エフライムの初期の歴史におけるヤロブアムがそうしたのと同様に、ねたみの像を立てた。

レビ記二十六章の「七つの時」は、ミラーが理解するよう導かれた最初の時の預言であり、1863年の反逆において退けられた預言の時の最初の宝石でもあった。1863年は、ミラーの夢の宝石が覆い隠され、偽の宝石や硬貨が持ち込まれ始めることの始まりを画した。「七つの時」は、家を建てる者たちが捨てた隅のかしら石であった。1863年には、ミラライトの神殿を建ててきた者たちがこの「七つの時」という礎石を退けたが、終わりの日にはその石が今や隅のかしら石となっている。その石は永遠の岩を表しており、また「主が造られた日」によっても表されていた。というのも、それは土地のための安息日の象徴だったからである。1844年、ミラライトの再臨運動はヤロブアムの偽りの礼拝制度を戒め、第一の失望を「喜んだ」「嘲る者の会衆」から分離した。

建築者たちは、決して「嘲る者の集会」に戻ってはならないと指示されていた。それは、ユダの預言者が、彼を1844年へと導いた道とは異なる道でエルサレムに戻るよう指示されていたのと同様である。彼を1844年へと導いた道とは、彼がそこから出てきた道、すなわちプロテスタントであり、その歴史においてプロテスタントは背教したプロテスタントとなっていた。建築者たちは、決して「嘲る者の集会」に戻ってはならないと命じられ、また、彼らの食べ物を食べたり水を飲んだりしないように指示された。建築者たちは1840年に天使の手にあった小さな巻物を食べ、その食物は彼らの口に甘かった。

預言を食べたり飲んだりすることは、聖書を研究するために用いられる方法論を表している。ミラー派には神の御言葉を研究するための特定の方法が与えられ、その規則は、背教的プロテスタントとカトリックの神学者たちが墮落した方法論で生み出したものとはまったく異なる聖書的メッセージを生み出した。建築者（同時にユダの預言者でもある）は、背教的プロテスタントやカトリックの方法論に戻ってそれを飲食してはならなかった。ところがユダの預言者はまさにそれを行い、それによって、ラオデキヤ的アドベンチズムが1863年にまさに同じことを行うことが示された。というのも1863年に、彼らは背教的プロテスタントの神学的論拠を用いて、ミラーによる「七つの時」の適用を退け、その結果、アロンとヤロブアムの嫉妬の像を据えたからである。こうして、ラオデキヤ的アドベンチズムの第一世代が始まった。

ユダヤから来た預言者がヤロブアムとやり取りした後、彼はユダヤへ戻る旅に出たが、結局たどり着けなかった。預言者はラオデキヤ的アドベンチズムを表しており、靈感によれば、それは1856年にミラー派運動の中に入り込んだ。ホワイト姉妹はアドベンチズムをラオデキヤであることとすることを決して撤回せず、ラオデキヤが変わるという聖書的な証拠は存在しない。個人としては自らのラオデキヤ的経験を離れる者もいるが、教会としてのラオデキヤは主の口から吐き出される運命にある。というのも、ラオデキヤは「裁かれた民」を意味するからである。アドベンチズムはこの定義を用いて、自分たちは天の聖所における審判の期間に存在する教会を表しているのだと主張する。彼らは盲目であるがゆえに、ラオデキヤの意味に含まれる調査審判の要素は認めるが、その名に明確に表されている執行審判を見ることができない。

ラオデキヤにある教会の御使いに書き記せ。アーメンなる方、忠実で真実な証人、神の創造のはじめである方がこう言われる。『わたしはあなたの行いを知っている。あなたは冷たくもなく、熱くもない。むしろ、冷たいか熱いかであってほしい。だから、あなたは生ぬるく、冷たくも熱くもないので、わたしはあなたを口から吐き出そう。あなたは「私は富んでおり、豊かになって、何も必要としていない」と言うが、実は自分がみじめで、哀れで、貧しく、盲目で、裸であることを知らない。』黙示録 3:14-17

結局、ユダの預言者は、彼を欺いて自分の食物を食べさせ、自分の飲み物を飲ませた偽預言者と共に葬られる。二人は同じ墓に葬られ、ベテルの偽りの預言者（偽の教会）は、ユダの預言者が死んだとき、彼を「兄弟」と呼ぶ。

さて、ベテルに一人の年老いた預言者が住んでいた。彼の子らが来て、その日ベテルで神の人が行ったすべての業、また彼が王に語った言葉を父に告げた。父は彼らに言った。「その人はどの道へ行ったのか。」ユダから来た神の人がどの道を行ったかを、彼の子らは見ていたからである。彼は子らに言った。「私のろばに鞍を付けなさい。」そこで彼らは彼のろばに鞍を付け、彼はそれに乗って、神の人のあとを追って行き、樅の木の下に座っている彼を見つけた。彼はその人に言った。「あなたはユダから来た神の人ですか。」彼は「そうです」と言った。そこで彼はその人に、「私と一緒に家に来て、パンを食べなさい」と言った。だが彼は言った。「私はあなたと一緒に引き返すことも、あなたと一緒に入ることもできません。この所では、あなたと一緒にパンを食べることも、水を飲むこともしません。主の言葉によって私に、『そこでパンを食

べるな、水を飲むな。また、来た道を引き返すな』と言い渡されたからです。」すると彼はその人に言った。「私もあなたと同じ預言者だ。主の言葉によって御使いが私に、『彼をあなたと一緒にあなたの家に連れ戻し、パンを食べさせ、水を飲ませよ』と言った。」しかしそれは彼に対する偽りであった。そこで彼はその人と一緒に引き返し、その家でパンを食べ、水を飲んだ。彼らが食卓についていたとき、彼を連れ戻したその預言者に主の言葉が臨み、彼はユダから来た神の人に向かって叫んで言った。「主はこう仰せられる。『おまえは主の言葉に背き、おまえの神、主がおまえに命じた命令を守らず、引き返して、主がおまえに「パンを食べるな、水を飲むな」と言われたこの所でパンを食べ、水を飲んだ。ゆえにおまえの死骸は先祖たちの墓に入ることはない。』」 列王記上 13:11-22

1844年の夏の第二の天使のメッセージは、プロテスタント諸教会が墮落し、カトリックの娘たちとなったことを指摘するものであった。ミラー派アドベンティズムは、男女にこれらの教派から出てくるよう呼びかけた。そこにとどまることは霊的かつ永遠の死を意味したからである。ベテルの偽りの預言者は、ヤロブアムがベテルに設けた宗教制度を表している。それは獣の像を立てる制度であり、その模倣の対象となった獣はカトリックの獣である。プロテスタントたちは自らをプロテスタントと称し続けたが、礼拝の日として日曜日を守り続けた。それはカトリックの権威のしるしである。

プロテスタントは自らをプロテスタントだと主張するが、プロテスタントの唯一の定義はローマに抗議することであり、そうすることによって彼らの自称はローマ教会の模写となっている。というのも、ローマ教会もまた、その主張に聖書的な正当性がないにもかかわらず、自らをキリスト教的な機関だと公言しているからである。その主張は伝統と慣習という空虚な権威に基づいており、これはプロテスタンティズムが自らをプロテスタントだと称する際に頼みとするのと同じ偽りの権威である。それはまた、ラオデキア人として自分たちはなお堅固な契約関係のうちにあるのだと信じ込むよう、セブンスデー・アドベンチストの目を曇らせてきたのと同じ論理でもある。これはまた、古代イスラエルが「主の宮、主の宮、我らは主の宮だ」と述べたときに唱えたのと同じ偽りの権威である。

その警告はユダヤの民に聞き入れられなかった。彼らは神を忘れ、神の代表としての崇高な特権を見失った。彼らが受けた祝福は世界に祝福をもたらすことがなかった。彼らのあらゆる利点は自己栄化のために利用された。彼らは神が彼らに求めておられた奉仕を神から奪い、また同胞からは宗教的な導きと聖なる模範を奪った。大洪水以前の世界の住民のように、彼らはその悪しき心の思いのままにことごとく行動した。こうして彼らは聖なる事柄を茶番に見せかけ、「主の宮、主の宮、これらは主の宮だ」（エレミヤ書7章4節）と言いながら、同時に神のご性質を歪め、御名を辱め、聖所を汚していた。

「主のぶどう園の管理を委ねられた農夫たちは、託された務めに忠実ではなかった。祭司と教師たちは、民の忠実な教え手ではなかった。彼らは、人々の前に、神の恵みとあわれみ、そして神が彼らの愛と奉仕を要求する正当な権利を示し続けなかった。これらの農夫たちは自分の栄光を求め、ぶどう園の実を自分たちのものにしようとした。人々の注目と敬意を自分たちに集めることに心を砕いていた。」 『キリストの実物教訓』 292頁。

1863年にミラー派の運動は終わったが、1856年にはすでにフィラデルフィア派の運動ではなくなっていた。エリヤ（ウィリアム・ミラー）によって提示されたモーセのメッセージ（「七つの時」）は退けられ、その退け方はベテルの偽預言者の方法論に基づいていた。1863年は1798年に始まった65年の終わりであり、イザヤ書第7章の預言の終結であった。

ユダの王であるウジヤの子ヨタムの子、アハズの時代に、シリアの王レツィンと、イスラエルの王レマルヤの子ペカが、エルサレムに向かって攻め上り、これを攻めたが、勝つことはできなかった。「シリアはエフライムと同盟した」という知らせがダビデの家に伝えられたので、彼の心も、その民の心も、林の木々が風に揺れるように揺れ動いた。そこで主はイザヤに言われた、「今すぐ出て、あなたとあなたの子シェアルヤシュブは、晒し場の大路にある上の池の水道の端でアハズに会いなさい。彼に言いなさい。『用心し、静かにしていなさい。恐れるな。これら燻る燃えさしの二つの尾、すなわちシリアと共にあるレツィンの激しい怒りとレマルヤの子の怒りのゆえに、気落ちしてはならない。シリア、エフライム、そしてレマルヤの子があなたに対して悪いはかりごとを企ててこう言っているからだ、「われわれはユダに攻め上り、これを脅かし、これを破って自分たちのために裂け目を作り、その中に王を立てよう、すなわちタベアルの子を。」しかし主なる神はこう言われる、「それは成り立たず、また起こらない。シリアの頭はダマスコ、ダマスコの頭はレツィン。六十五年のうちにエフライムは砕かれて民でなくなる。エフライムの頭はサマリア、サマリアの頭はレマルヤの子。もしあなたがたが信じなければ、確かに堅く立つことができない。』」イザヤ書 7:1-9

第八節にある六十五年の預言は、六十五年という期間の『うちに』、十部族からなる北王国が捕囚にされることを示している。その幻は紀元前742年に記録され、その十九年後の紀元前723年に、エフライムは散らされ、アッシリア人によって捕囚とされた。そして紀元前677年、六十五年の終わりに、マナセ王は捕えられてバビロンへ連行された。起点である紀元前742年は、イスラエルの北王国と南王国のあいだの内戦を画しており、ちょうど1863年が、アメリカ合衆国の南と北のあいだの南北戦争のまさに中心を画しているのと同様である。この預言は文字どおりの栄光の地（ユダ）でイザヤによって告げられ、1863年の預言は霊的な栄光の地（アメリカ合衆国）で成就した。

六十五年の預言の中には三つの節目がある。紀元前742年の内戦の十九年後、紀元前723年に北王国が散らされた。六十五年の終わりに南王国が散らされた。この預言は、その開始と終わりを含めて、北王国と南王国に対する神の「憤り」の双方を表しており、その二つの憤りはいずれも開始点に先立つ十九年があり、成就の後にもさらに十九年が続く。

全体としてのキアスム構造は、始まりと終わりを画する北と南の内戦の時期を指し示している。始まりと終わりのただ中で、その内戦の二つの敵対勢力は共に奴隷の身へと連れ去られ、互いに散らされた奴隷状態から一つの国民へと集められる六十五年ののちに、1863年に至る。これは奴隷を解放した奴隷解放宣言の日付である。文字どおりのユダにおける内戦の予言は、霊的なユダにおける内戦で結末を迎える。というのも、イエスはアルファでありオメガであるがゆえに、物事の終わりをその始まりによって常に示されるからである。

1863年の歴史は、預言者イザヤがその息子とともにユダの邪悪な王（アハズ）にメッセージを伝えた紀元前742年の歴史によって表されていた。本文では、紀元前742年はユダの王であったアハズ王の証言によって示されている。彼は神の聖所の奉仕を停止させ、さらに彼の大祭司に命じて、神の地上の聖所のまさに境内にシリアの神殿を模したものを建てさせた。

イザヤの預言によれば紀元前742年とされる、悪しき王アハズの時代に、エルサレムの指導者は神の教会に異教崇拜（カトリック）を持ち込んだ。ちょうど、ラオディキア的アドベンチズムが、エリヤによって届けられたモーセのメッセージを捨て去るために、背教的プロテスタント主義の方法論へ回帰したのと同様である。紀元前742年、イザヤはユダの悪しき王に、上の池の水道の端、さらし職人の野のそばで対峙し、その際、息子を伴って行った。その子の名はしるしであり、また、ユダからの預言者がヤロブアム王に対峙したときにも、彼はしるしを与えた。

見よ、私と、主が私に与えられた子らは、イスラエルにおいて、シオンの山に住んでおられる万軍の主からのしるしと不思議である。イザヤ書 8:18

イザヤの子の名「シェアル・ヤシュブ」は「残りの者は帰って来る」という意味である。残りの者を形づくる「帰って来る」者とは、遅延の時に主を待ち望む者たちである。

私は、ヤコブの家から御顔を隠される主を待ち望み、なお彼を求める。見よ、主が私にお与えになった子らと私は、シオンの山に住まわれる万軍の主からの、イスラエルにおけるしるしと不思議である。イザヤ 8:17、18。

紀元前742年、イザヤが邪悪な王アハズと関わったとき、彼は「待ってきた者たち」を象徴している。というのも、すべての預言者は終わりの日について語っており、終わりの日に「待つ」者たちは、最初の失望を味わった者たちだからである。エレミヤは、神が偽りを語り、雨を止められたと考え、イザヤは、神が「その御顔をヤコブの家から隠された」と考える。しかしイザヤは、待ち、主を求めようと決心し、これは、幻が遅れる時の「賢い者たち」を表している。立ち返って貴いものと卑しいものをより分け、神の口となるべき者たちは封印され、それゆえ、獣の刻印を受ける者たちと対比された。

彼らのうちの多くはつまずき、倒れ、砕かれ、わなにかかり、捕らえられる。証しを巻きとじ、律法をわたしの弟子たちのうちに封じよ。ヤコブの家からみ顔を隠される主を、わたしは待ち望み、彼を求めよう。見よ、主がわたしに与えられた子らとわたしとは、シオンの山に住まわれる万軍の主から、イスラエルにおいてしるしと不思議とされている。彼らがあなたに、「霊媒のいる者や、さえずりつぶやく魔術師に伺いを立てよ」と言うとき、民は自分の神に伺いを立てるべきではないのか。生ける者のために、死者に尋ねるといえるのか。律法と証しに立ち返れ。もし彼らがこの言葉に従って語らないなら、そのうちに光がないからだ。イザヤ書 8:16-20

次の記事でこの研究を続けます。

これらはホワイト姉妹の言葉ではなく、主の言葉であり、その使者があなたがたに伝えるようにと私に託されたものである。神は、あなたがたがもはや彼の御旨と食い違う働きをしないようにと呼びかけておられる。自らをキリスト者と称しながらサタン

の特質を現し、霊と言葉と行いにおいて真理の前進を妨げ、確かにサタンが導く道をたどっている人々について、多くの教訓が与えられた。彼らは心のかたくなさのゆえに、本来彼らのものではまったくない、行使してはならない権威を握りしめている。大いなる教師は言われる、「わたしは覆す、覆す、覆す。」バトルクリークでは人々がこう言う、「主の宮、主の宮、私たちは主の宮だ。」しかし彼らは普通の火を用いている。彼らの心は神の恵みによって柔らげられ、従えられてはいない。Manuscript Releases, 第13巻, 222ページ。